新局玉石童子訓

巻廿四

1279
89

1279
39

村田

新局玉石童子訓巻之二十四

東都　曲亭主人口授編次

第五十四回

渾不似と辨して防守宿を移す
小雪太名を竊て巧ふ悪を資く

却説韓錦樅二郎ハ當日鏑野郡司範的の第よりかへり来ふけるに李彦八重作名出迎へて。那里の首尾を請問ふ樅二郎答てその義ふ就て云ふ話説ヨヌろ。大江峯張両君子の意見ども皆くべしとそ躰て閑室ふ招ひ集へて。鄭ふ鏑野範的ふ樅二郎ふ對面のゝち他ゞらいつることの顛末並ふ鬼薊苛三錢持隈八の為体且坐角力のことまでも。送ふ告て亦ふ彼刀祢ハ左ふ右ふ拔る少女のことふ就て人の虚談を信容けん咱ゞと疑ふ心あり。されども件の一條ハ情慾の送恨のゝ公達ゝる支ゝるねば陽ふ明々地ふ公られねども。胸裏ハ料り

かざろ。然るに尚思ひぞふ。拔る少女を我家ふ。その儘留め在らきん。後ふ女から
ざる所あり。その美甚麽と譚ずるを。季彦ぞ答てゐる。現彼人の眼目ふ
始めて今と思ふ。我們父女の支ふ就て。主人ふ出りあらやうに後悔茲ふ
連がけん。只速ふ去んのみとらくと八軍作推禁めく翁然のごとく惜りあるを鎬
野殿の疑ひ。我兄の美女を取りしゑんどあらぬとひとりて尚ほ人の虚
談を信容たる惑ひふあるあらん。そる素よりゑるまじと鮮ぎとも疑
ひの霧ハ一雲時の程ふまで。必霽る時あらん然たらば怕るとかいとふく季
彦推返して賢弟の言ハ已を知らで。人を知らざるふ麻かりぞや。今の世人心錦の
袱ふ毒石を裏るも是ヨヌろ。彼人本意を遂ざれば猶く思て我女兒を奪略
まく欲せん狡是も亦知るべうぞ。汗を思ふぞふ假の宿を惜て身を人とせと
危くせんハ思慮ふ似たり。只速ふ去んのみといへば成勝然と応て防守主の

遠慮寔ふ故あり。実ふ去らまく思ひぬる。我舊里へ赴ぬる安藝の治比ハ路
遠れども翁の故郷も西の天肥後の阿蘇へも便路とへば通能も俱ふ安ち。
亦只治比のこゝろ毛。津國住吉の邊ふハ我兄十二屋九四郎の櫛舗あり。先那
里まで赴ぬる。然だうの資助あらん。とらく縦二郎ちゝ雪てそも皆便宜る
けれども。今ハ病後の老先生ふ脚小をも伴はせて遠く牛遣るべもあらず。當
國妙義山の麓路ふ和田十郎正忠と唤做しける一箇の郷士あり。在昔南朝の
北畠明徽入道彼山ふ隱れぬしより。廻山の名ふ呼しと後ふ妙義ふ改めた
ア彼正忠ハ楠氏の一族其大父の時ふ明徽法師ふ從ひて。當國ふ移
住しより今猶那里の郷士。家ふ兵法七書を傳へて。よく其奥義を極めたれども。
諸家の招ふ応ぜずとなり。清貧をとりて樂とせり。小可妙義様名へ詣る毎ふ。
必那里を宿ふ。一ひ交りを結しより。倶ふ断金の契あり。先生遠く思慮

アそ。今愛と共侶ふ宿りを換まく思ひめぐらく那里へ赴くの郷道ゆを我
弟八重作とまをす者。あの美ふ任せぬ。とられて季彦沈吟ぐて舊君世を
去りぬひて、憑ーからぬ世間ふ難面ものの命ゆそ猶人さまれ泥會ふ為る上の
進退を已ぐ隨意擇むい要る。左も右も計せぬとのふ樅二郎歎びて。這里
と那里い同囲ゑれども鏑野殿の采地るねば是安身の一ゆそ絶ぎ安否を訪んも
易ろ。異竟這里ふ置まるまるふ殊るべくもあらぎかーとらひ慰ゑれば成勝も
舎笑るぐる通能と面を注ーて俱ふ安ろ。介らんゆ我们も妙義榛名へ参詣が
てら。その和田生を訪まく欲ぎ俱ふ紹介と願ふ而已とのふ樅二郎苦笑まく。
西君子ゆい障りもるぐふるどてや蚤くゆり捨く俱ふらんとらるやらんと本意なく
と呟くと季彦然ゆそと慰めて一説既ふ定る上い按るとも召よせそゆろ行きー
せいん按る按ると呼よまる聲より先ふ心を奪る。按るい既ふ次の間ふ居り。

ゆろ貌ふ出て来ぬるを。季彦猶も喚近つけて你那里ふ在さらば衆説の趣を
笑ひらん明日い宿りを易まく欲ぎ。皆も皆主人の好意ふよりも。宜く禮を稟
あれとあふ按るい応とまろ。樅二郎ぎるふ向ひて。その歎びと演る程ふ押繪い
渾不似と携て納戸の方ろ出ぐゆろ。樅二郎ふ向ひてらゆろいねる日ゆ又ぐ
立合阪より。賓客達を伴ゆそかり来まーその折ふ彼轎夫ぎ茶店に
媼ふ憑れるとそゆの樂器を空轎ふ載てゆく来てよりと云云と告く奴
家ふ遣與ーかども。その折い支敏ふくそゆ身ふ告るふ眼るけれぐ。ぐ儘架棚へ
藏め置ーとうち上れる鈍ーさよ然ると方僅ゆの團坐の商量と洩ぎーろ。
同胞ふーも異るる按る少女を留めるゆる。餘波と惜む心らゆの樂器ゆを
ゆる思ひ出ぐくのそまるゆ。今日ふ及び者も罰の罪と饒させゆい孫。とらひて遣與
き渾不似を樅二郎受合りそ。ゆる物るねどゆ今日まで咱ぎふ告ぎ

ア一念人過こる名聞るらむや。以後を吃と慎まねと叱りろ呵々とうち笑ひて。
喃防守先生あん身いぬ日立合阪ゆて。這渾不似と狩らの樂器と彼某店ゆ
貽置て立去りゆひ一開ぐ迹ゆく。咱名云云と少知りて世ゆ珍した這渾不似
あん身の所藏るりけるを。這那人の認りたらんゆ其頭ゆうち垂槽れるぐ。ちん身のを
かい我恥へと思ひゆけれ茶店の媼ゆ然ぐうの銭と含らせてとり復しそのく来
兎亦復旅宿の慰種ゆ做一ゆいぐやと。説示一つ。指出を渾不似を季彦屋を
ら受含りて開ゆ又思ひけぐた主人の用心謝まるゆ堪こう。這渾不似いねっ比
我身ゆの驛の客店ゆ逗留のそり料らぎも見出して。購求めこちーとう。禍鬼
父女の身ゆ貧縁りて。終ゆ這渾不似をりて。袖乞ゆるまぐふるりーと後ゆ思へば
名詮自性ゆの渾不似を和訓ゆ讀ぐ。即まぐゆ我是をのく然ーも
旅宿の徒然と慰めぐゆと思ひけ。初一念ゆ渾不似亦只ゆのるのをらぐ。

たぐめ彼媒妁児と只憎ーとのを思ひこう。初一念ゆ渾不似再會のをり問
考られぐ其人ゆ我故朋輩間貫嗅の豪子ゆ。親族ゆも優ゆ資助ゆ遇こう。
然れぐ又我ゆ稚ゆ女児とゆて故郷と惑ひゆ八九稔と廢歩るまぐ只舊君のれ
隱宅と索ゆ巡りー忠心の移らざるゆ渾不似茲ゆ逝ゆの迹ゆ来ぐ其墳墓と
拜まるのを身の遣る方のるくなりーと。主人の郎義ゆ慰められて猶逗留ゆてゆりゆー
るぐと詮盡さぐやと思ひこう迄の誠心ゆ渾不似亦料らぐる障り生ぐて他所ゆ宿
ゆと扱るゆ至れり。猶数まく月ゆの外ゆも渾不似のるるゆ。是ゆと思へ這樂
器ゆ古ヨヨくーて古寡ーゆを思ゆゆ弄ぐ。恥と知らざる者とゆられん只ゆち折て棄
んのをとゆひくそぐ盡掻遣ると。樅二郎ゆ左右ゆく含らゆ感嘆ゆく且ゆ主ゆ先生の
意見理られども。約莫事の齟齬ゆるゆ時運ゆ来ぐ。ゆの樂器の故ゆゆらゆ
とも渾不似とゆ名と憎まゆ。ゆち阿弗禅院の彼後の山ゆ瘞めて仁義忠孝四

を経の表と後ゐ送ーるべ先生父女の忠孝いさらこ大江峯張の仁と義とからゐ望洋
ら
ぞふ至るまでなの志亡親ゐ渾不似の義をーも是ゐ由て此を思で百稔の後と
ゐふとも必知音あるべうん。咱ぞふ任せぬこれと説諭ーて渾不似を庭とら曳よ
せ食抗て。押繪是よく藏め措ね。とらひて渡せがてろとゐる押繪い袖ゐ抱ゐて
躰て納戸へ退りける。然ばその後一郷の擾乱対治あるゐ及で樅二郎い彼渾不
似とらひつる如く阿甦寺へ瘞めて四絃七言の表と石ゐ送ーける。ある是後の話説
人却説杜四郎成勝い通能と共倡ゐ件の問答とうち宇て。好と稱て且ゐ宇防母
嗅の辯論も亦主人の主張も各其本居あり只本居ゐ者い我们主僕の去向のこ
前ゐも既ゐらけりー。明日い夙めて防守主ぞると共ゐ妙義ゆうすく欲ぞまの義を饒
ぬゐひね。とらひまて樅二郎欲ゐ沈吟ーて答ら宇両賢兄いるまこば早く去すく
欲ーゆゐ切て一年五六月教と受ぞく思ひーふそら情ゐと怨ぎれば成勝笑て

諭ーてらゐ宇。否とよ去向と急ぐふあらば彼留生の人と成りを守ゐてよく是と思ゐ
开も一人物ゐぞあらんぞ心早く對面ぞまく欲ぞ其頭の所要を果ーるべかゐ来ゐとも
けーういまこば明日と涯りの別れぞうんや怨らくとかゐと解れて樅二郎笑ーけゐ余ら
んゐ安堵ーう。就ぞて亦情願あり両賢兄の仙丹い效驗已も知る所いるぐ少
許賜らば白打角力のよゐ就ぞて未然の怪我を防ぐべーいっくとと求れい李彦
と八重作も共倡ゐ稱賛ーて彼仙丹の神妙る已ぞるぐ身ゐ取りて起死再生
とらひつべー。角力白打と嗜者貯禄て外と放さぞば人と救い已と救ふ神佛の
擁護ゆも優て憑ーかゐべーと誉れば樅二郎然ーと答て已彼仙丹と聊えとも
ゐぞらんゐ不断ゐ身と放ーとうく角力の場ゐ茨日い裸体の准備ゐ最小るる。
貝ゐ移ーて髪言の裏ゐ藏めくりて言用ゐ充ん両賢兄饒ーゆるぞやと乞れて
成勝通能い異説るく俱ゐ答てらゐ宇。ゐの仙丹いゐる比ゐ多る人ゐも施ー

たまゝ今ハヨヽくまでもられども莫逆知己の主人の為ゆゑかの惜むべき目今分ちてまあらせんとおもひて各腰を探りて彼藥籠をとり出せば樅二郎ハ歎びゆ堪ずして遂に自を起して伐戸架を開き見るゆ黒漆ゆゑ小形なる一箇の香盒ありければ是よかしこと金を出て大江峯張の分ち與ゆ彼仙丹を受ゆ歎び氣色ゆ見れて千謝萬謝も猶足らぬ這両主僕の仁徳を連らゆ稱て已ざりけ然れども其後樅二郎ゆ其仙丹を分ゆ放さゞ支ありて他へ出る日ハ必最小なる貝ゆ移ゝ是を頭髪の裏ゆ藏めて人ゆハ絶て知らざりけり問話休題蓋李彦按ずるの猛可ゆ宿りを移せよ未然の危殃を禦ぐ為ゆれば一日も早く去を好と考へ成勝と通能ゆ只管ゆ薦る隨意樅二郎ハ彼父女子の為ゆ雨衣脚袴草鞋まで准備せ且那里ゆ逗留の程盤纏ゆ宜くのしを八重作をして送らせけり然れどその次の日の旦未明ゆ成勝通能も一路人ゆ皆共侶ゆ立出る程ゆ李彦按ずるハ主人

胞兄弟ゆ歎びと演恩義を謝して書翰詞の開ゆ中ゆ押絞ハ按ずと別を惜して今よりの後秋冬の衣ハそのゝくゆ必贈りまゐらせ素よりの送別を秘して人ゆ告ざりければ生平ゆ未ゆる四隣の家家ゆまで日を經ゆ知らざりけり案下某生重説曾根見伍六郎健宗の奴隷小雪太ハ往る四月下浣の時候美濃國野上の驛ゆて主の伍六健宗が遊興の為ゆ逗留の程彼身ハ酷く醉ひ臥して覚ずゆ其夜又彼九十餘金ハ衣物両刀鼻紙嚢窓井の方の健宗ゆ贈りたりける短刀まで送ゆ竊盜して逐電して走る程ゆ天ハ明るゆ時候一箇の大漢ゆ撞見して蹴られて氣絶ずるけるそのとき光景ハ前版第四十九回の十五頁ゆ出られば看官兼知のゆるらんを今又具ゆ考へ其頭を過る馬奴ゆ呼活られて忽然と我ゆ復りて四下を見るゆ彼大漢ハ逃亡けん腰ゆ帶たる両刀ハさらゝ懐ゆあるる財嚢の金も搭馳ゆたりける袱包も奪ゆられて

なりとなれバ且呆れ且憂悩て後悔茲に達よしもなく頭を低れなどヽ又忙然
たるのミ半晌許ハたヾ計の出る所を知ざりけれども猶幸に身に着たる夾衣二許
と帯と汗衫ハ剥畧られず又彼短刀ハ始腰に餘るの故に懐刺にさしたりしかバ是
らも畧残されて故の儘にてあり是に聊慰めて猶畧残されし物やあるとて身を起て
其頭を渉猟るに後方五六間許なる夏草の中に彼鼻紙嚢裏捨てあり我物
なれバと拿抗見るに這裏にも小出の金二三分ハありけるに开ハ如才なく奪略けん只
彼窓井の方の上野なる嬢前に贈る一封の書翰ありけるハ天の與とうち戴きて篋
く懐に挾めつ地方の人にや怪められん追隊の蒐るもやあらんと思へバ捷径を討ね
て東を投て走る程に彼鼻紙嚢を售るとて銭四五百を得てければ敢亦饑も
甘ず當晩宿りを投めし客店にて逆旅主人にいひ哄へて日頃蓄たる巳が被ていける甚
床唐二の夾衣と汗衫さへ沽却して此二の盤纏のなぞ来しかバ又膳太くも計較あり

毒を喫ひ碟子まで世話ハいへバいへ我上野白猪に赴きて彼鏑野の大刀自
親子を上旨く哄して盤纏の金を甘乞出して他郷へ走らバ我生涯ハ安かるべし嗚
呼介々と肚裏に悪念ひつく已時も是より連りに路次をいそぎてゆくと只一日なら
ず四月も絶にたりし時候鏑野郡司が軌的の第宅に早く索ね来て却執接の
青侍に就きていふやう己ハ當家の外戚にて事ありて近江なる觀音寺より来ぬる
者なり大刀自御前の恙なきやいかで拜見せまく欲するのよし稟しねとぞいふに青
侍ハいぶかりて其儘奥へ退りしを候ちて約莫半晌許。這回ハ亦其人易りて一箇の
老僕出て来つ小雪太を左見右見て和殿近江の觀音寺より来ぬるとぞ
まいまでてあつなるがことそれハ姓名来歴詳に問へと御前の仰を唱ちに稟し
告られよとのれて小雪太阿容る色なく然ハ在下ハ大刀自御前の姪なりける
曽根見五郎平宗玄の弟にて伍六郎健宗是ハ當家の親族なるなれバ路

いろいろの雑や
こまちゑ近江絵
本編作者自題
大とし
のうまこと

とさめ
假たまゆら

遠ければ一たびもまざ對面致されども名告まうせば立地ふん疑ひ解ぬべし況我
女兄窓井の方の寄まゐらせまうす書翰茲ふ在りその他正き證据あれども人倫
の遮與がさうり在下今恥を又忍びて身單ふして來ゆるゝ言一朝ふ盡さべる
あらぬ悄地ふ對面を願ふのみとらふ老僕いみろる果て然らばいろる趣を備ふ
御前ふ申え上げ姑且俟せゐひれと心で躊躇て奥へ退りて又遽しく出で來る小雪
太ふうち向ひて和殿の稟さる趣を主君御母子ふ申え上げふ對面せんと宜ふ入卒
這方へと先ふ立て庖温門より案内をまゐる二間狹三間隔さる編室ふ俱しても
兄かが當家の老母大刀自ハ其子紀軍的と共倡ふ既ふ上坐ふ居て小雪太ゞ來ゆるを
見て贋物へとハ夢ふも知らぬ色白くして優像る十六七の青年児ゑれが毫も疑
ふ所ろなく是へと招ひ寄まれば小雪太ハ阿とどろふ遥ふ膝行頓首して頭を抬
げ仰ぎ見れば老僕ぞ疾那方へと連りふ請ゆ已ざれ小雪太ハ爲ちやくふ入り

たく席ふ就ゆく大刀自親子と二拜まう寒暖を陳差る兄を祝まれば大刀自ハ
涙連て誠ふ思ひかけざる兄今日伍六郎ふ訪れんとハ曾根見ふ觀音寺殿の權臣
ゆゑ女兄の窓井共倡ふ主君の覚淺らぬ秩禄も亦置しからぬと豫ゆ〻ふ似る
べくもあらぬ兄ゆゑ窓々まゐる身單ふして來ゆるハ必故あらん少年輩の習俗ふて淺妻船の
淺まし兄恋ふその身を果せ狡秘さぬ告よ甚麽ぞやと問れて小雪太羞ふ
踧然とゆゑ答まう否然る浮ることハあらぬ主人公も聞召れよ叔も本月初旬意外の
禍鬼起りしより兄宗玄ハ七鹿山ゆゑ同士數しと陣歿まう在下も亦冤屈の罪
ゆゑ久まく獄舍ふ繫れしと僅ふ女兄の資助を乞ゆゑ追放せられひて首とハ箇樣
箇樣尾ハ亦如此々々へゆゑ長橋泉船両近習の外大江峰張王僕の外高嶋石
見介の支まで宗玄健宗の身ふ於て有ハる始末ふ卓仁実を交へて說話りく
又ハまう兄宗玄の陣歿ハ貳まろある奴们を甘叉除まく欲まる忠義ゑれを高嶋

ら
ぬふりをし掠られてその支度をも竟ふ非分ふせられしかど在下いふく然ふ堪ぬ心を言嶋
石見次と駁して彼寛を鮮まく思ひ者も身單也外ふ援の兵るければ却て敵ふ翻
捕れて又誣られて乱妨の罪最重しと定められ竟ふ追放せられさり皆是老黨又
賀曲膳と一口鬼大夫ぞ石見次ふ荷檐ある貝賜肩の沙汰ふ成るあら我君ふ
明ふまそ曉ぬぞ我女兄諫諭亶せど其甲斐なを爭何ハせん然れば我身近江と去
る女兄窓井の密使とて衣裳短刀些ばかりの盤纏と贈賜りしかば辛くあく
只一個今日も這里へ來ぬるとを知ら先ず是と見臨ぜよとのひて窓井の書翰一通
と彼短刀と両ふ捧て膝と找めて呈閲あれば軌的いふもさらく大刀自ハゆくと無
或ハ怒り或ハ哀む嘆息の聲ふ沿さぞ先其書翰の封皮を折て讀見ると二
三遍又短刀と拿抗て現ぬの一刀ハ豊義ふ我良人の身故りあひし時姪の窓井ふ
紀念ふとそ贈遣しける物ぞれば然ても意を用ひられけんかどう正しく照据ふ

且窓井ふハいまぞ對面せざれども年毎ふ雁の翅ふ寄らるし書翰今も猶藏
めそ文匣の裏ふ在り我よく認れるを跡るれば疑ひと鮮くふ足れり是見ぬとそ
其二種と遞與せば軌的得と見て宣ふ奴々の宜ふ如し少くば如ハ高頼の賞
罰錯し活矣ふ堪ぬり古語ふいはぬぞ銀淪ハ樹と擇て栖む賢者ハ君と擇て
仕ふ小る層君ふ仕どるりハ伍六和殿の幸ひ宗玄の陣殺ハ今さら惜めども
その甲斐なし健宗ふ訪れハ一辟月の資と沿るが如し我ふ弟兄あることなけれ
今日より小弟と思ハるる幾までも茲ふ居て我と資よ然もるら良主と擇く
仕させん奴々然ハ思さぞやとのひ慰れば大刀自ハ笑ひて屡點頭てそる歟ハ
侄ハ猶子の如しとハいふあらと狡ぬれハいふで狡憎う思ハ然ハ這身の皮でハ
一家児る老黨奴婢まで相貶て侮るべし宜く計ひのこれとのふ軌的心を去
ぬ堂鳴しと納婢と召て支云云と吟味れば納婢いまろる退て程もあら

ぞ夾衣と外套袴と両刀と廣益ふ載てのく来ふければ軌的い是をとりて小雪
大ふ向ひていはく。和殿い長途の疲労もあるべ。先客房ふ退ぞく宜しく衣裳を更
めて隨意休息ちのへかし。といふ小雪大意外の歓びるの舞足の踏む所を知らず。
その賜のめを受戴て退んとする時軌的い又納婢ふいはく若なるいかもぞ知ら
ぎるべ。他い近江ろ訪来ぬる我弟ふ名しる者之婢毎ふもひ次で等閑ふ歎
待るそ既ふ東西欲くに時候るべ。庖丁児ふ吩咐て夕饌の儲とらそぐれ先客
房ふ案内をせぎやといふ納婢いるる果て又廣益と両ふ合りて案内をせば
小雪太い鏑野親子と二拜るる。歓びと演恵を謝して。そぐ隨引れて退りぬる。小
後又軌的い老僕某甲と召よせて曽根見がと云云とのひ知らせて亦いはく。他ら
我弟品るれ苛二隈八郎いさらと奴婢ふも傳示して無禮の歎待をべらむと
いと厳ふ吩咐かぬ依皆怕れて小雪太と主君の如く敬ひけり。小程ふ小雪太いの

夕鏑野が客房ふそ二の饌添るる酒飯ふ飽て且浴室ふ案内をせられ浴ぞ果て
程るる。萌ぞるるる緑葱の蚊帳ふ單宿る。絳麻裏の夏横さへぞ已の
時い過れども。夜中の鐘の響るまで。近習ふ陪堂せられる。歎待十二分るりけ且ば
肚裏ふ思ふ。我微妙くも謀り給ぞ深念ふ弥増大極上を無類無量の造化な
まとも。倘真の伍號が迹より茲ふ来るるらば忽地馬脚を相生ぜて我上ふ恥ら
むぞらの其頭の障りる間ふいぞ大刀自と賺誘て思ふの隨ふ般纏の金と後ら
生ぞふ安るべけまと逗留ぞ幾日もあらぬふ然ることのあらぞ。主人親子の機と
攬て。毎ふ聴れぞ思ふ局い入るべくぞ非除伍號が迹よりて来ふらば
我い先入ふ為て主位ふ在り他奴ふ腮を喰せざる。せん術いならもあらん。さあこと怕るくるかい
と豫の伎倆と胸ふ斂めく最正首ふりめせ。かが軌的い次の日より小雪太を吸近つ
けて近江のるを向試と或い四表八表の話説させて是をいぐふ小雪太素より口オ

あり。智計も有人ふ生えーかゞ範的漫ふ愛欲ひてゝと憑ーく思ひけり左右を程ふ
端午の佳節ふ至りゆゑの日い朝より午過るまで鏑野の家例ゆく種々の祝儀あり。
既ふーとそのゆ果くる末の時候より範的い菖蒲酒を酌んそ南向ふ小書院ふ
居り。小雪太と上客ゆそ鬼薊苛三百絮鍼持隈八刺高名と称らせそ酒盃と
ぎん流も程ふ王従齊一笑局ふ入りそ千春萬秋とも祝ーける开ゞ中ふ範的ハ畳猛
可ふ嘆息あり。一聲呀と叫びーかゞ小雪太ゆうち驚ゞてその故と請問ふ範的い
額と押て悄然ーとそ合てゝゆう我已がゞ遺恨ありゝれども我威勢とのゝ怨と
報ふゆゝるゝゝ其ゆ情慾ふ起れゞゝゝの故ふ懲膨憤の遣る方ゆて色ふも出ぬ憶ぎ
嘆息あるゝとゝふ小雪太點頭て何ゆやらんと思ひひーふ然ゝるの義ふ御心と苦
あるのゝゝ大人氣ゆ非如領主の威勢とそ報ひがゞゝ怨とも計策と旋らさゞ情慾
も亦憚るゆゝゝ公道と借て拉ぐふ何でゝゆゝゝの隙設るゝゝゝその情由仰せられとゝゝ

きそて範的笑ふそゝ憑ーゝるゝゝゝゝれども我口親ゝゝ出さんハ面伏ゝ苛三と隈八ゝ
始ゝゝーて彼顛末と都系知の者ゆふ我為ふ説示さまゝとゝふ苛三と隈八ゝ
ゝゝて共侶ふ小雪太ふ告てゝゝゝ。近江の郎君聞召れよ。當主君の送恨の條々箇
様箇様ふいとそ始鏑野範的が旅宿の處女拔ゆと春恋て韓錦樅二郎を
媒奴ゆそ妾ふせゝく欲ゝーふ其支竟ふ成らざれゞ樅二郎も堪ぎゝゝけん件の父女と
追けふ。ふ後腕く和睦き悄地ふ宿所ふ引入れてこゞ妻ふゝゝとふ風聲あーゆま
でも咽紀告て又ゝゝゝ韓錦奴ゆ已ゝも坐角力の送恨あれゞ媚紀とゝゝゝもゝゝ
いゝゝる日腹心の奴隷とゝて他奴が宿所と拐せーふ拔ゆとゞ那里ふ欲遣ーなゝ欲賜
せ欲今ハ那里ふ居らぎとゝゝ殿の送恨ハ只是のゝと告れゞ範的も聲と低めく。
韓錦が家の食客ハ拔ゆ父女のゝゝゝぎ大江峯張と欲唆做ーゝゝ撥歴児ゝ
も逗留ゝれど既ふ他郷ふ立去りけん。昨今ハ見えぎと咨ゝゝの大江峯張ハ健宗

和殿の怨ある彼武者修行の両少年。主僕ゆいあらざるやと問へば小雪大眼を睜
アてそゝ違ひ〳〵違ひ〳〵他奴名まの地ゆ在るゝべ兄の怨を復さんゆ我ゆくゝ
遅くして其義ゆ及ばざるゝ他奴名ちぶ幸ひ弁ゆ左すれ若もあれ主人公の怨敵を
手寡の知れる市人ならばゆ擒ゆせんも易かるべ。と誘るを的推禁めそ然るひ
そ曾根見生彼韓錦ハゆ名る猛者ゆそ武藝胆勇無雙の剛敵公事ゆあらざる
より。阿容々々とゆを束ねて擒ゆせゝる者ゆらんや。侮る時ハ衍恐あらんとゝハ小雪大令
笑ひて虎狼の猛るも獵戸の儲措く陷井ゆ陷る時ハ阿容々々として死を俟のみ
然れば彼韓錦とやらん萬夫無當の猛者へも計をもて倒ゝ弁ゆ無しと首を
斬べ。其計畧ハ箇様々々と説示まる半晌許。説果て又ハよゆ。其猴児ゆ使ふ
ゆよくその人を擇むべ。約莫這頭の里人ゆ認れるハ宜ゝかゝ又機ゆ臨み変ゆ應ず
る。オるゝハ宜ゝかゝ老実ならぬ事ゆ熟ゝる人ならぬそを行ふべれと皐蟲めゝて説

誇るハ昔ニ隈八ゆ的只管感激して堂子とうち拍ゝ奇なる哉妙
こと。我為の諸葛孔明楠正成ゆ伯仲ゆ死。計ゆそ微妙ける。それゆそ只今思ハ知ら。
いぬる日我奴隷毎の所以ゆて捕ゆる自鳥十六郎とゆ盗児あり他いゆの年来
美濃信濃路と徘徊て昼夜掙と目とゆゆの地へ新参の男ゆあり小るゆ我奴隷
名るさへ拔ゆ父女と憎ゆて他名ちぶ客店を追るゝゆ迹を追蒐ゆそ。その夕間ゆ
紛まぎれ。拔ゆ親を曳捉へ酷く撻懲を程ゆ件の白鳥十六郎ハ其打擇ゆ紛
れそ拔ゆ親の行発と盤纏を掠攫て逃走れゆ奴隷名ハ驚怒りて。拔ゆ
父子ゆとうち捨て其盗児を追ゝかゝ。その夜ハ及ばざりけゝ。前日竟ゆ捕ゝかゝ。疑て牽
ゆてかゝ来て。云云と訴るゆより我正聽ゆ立ち。件の盗児十六郎を堅ゆまく拷問
させけるゆ盗児ゆること疑ひなれば躯て獄舍ゆ殺ゆせゝ。因て我家の奴隷毎ゆハ猶
彼ゆ送りたる贓物の種ゝを。當坐の賞禄ゆ取ゆ毋ゆれ是ゆよりて今思ゆハ

彼十六郎の罪を饒して誘ふ利をとりて其我為に猴児に做りて件の秘事をとりて
べし。他より外に其人なし。とふて小雪大點頭て其究竟の役者之術を謀せのねをそ。
其期のるまで意を屬れ苛三も隈八さへ俱に感服をりけり這時月い敵に嘿然
近くるりしかが範的い是まで〻とて侍婢を召よせて盃盤を執斂やさまる程に苛
三と隈八る壽を陳恩を謝まそ退まくまそけるを範的を志に喚留めそ若き外に退
るるるに獄吏に下知を傳へて罪人自目式鳥十六郎を内庭へ牽入れさせまを絡くとのそ長。
苛三ゑ阿と応て隈八と共倡に外面投て退出けり然れば又範的い件のるれ准備の
為に單後堂へ退れて錦囊に容る短刀と腰刀と麻衣とを親携て出くまを。
故の席に坐を占て又小雪大とうち譚ふ程に入相の鐘高く響て折戸口なる楊
柳の梢に五日の月灰に見えそ。吹風凉をくるるり時候獄吏い士郎に捕索縛て
牽のそまを檐廊の下に推居てるを云をと呼え上れば範的見て點頭て獄吏に向て

ふるを我其十六郎に所要あり若い先退れ後に知るうまあるぞとのに獄吏いたく
ろ辺そ。捕索の端を傍る松の軒に繫留て辭して直に退りけり。當下鏑野
範的に小雪大に燭を秉せて端近くなる程に小雪大い灯光をて件の盜見十六郎を
まろともるく熟々相るに凄まげる大漢をて曩裏に彼美濃路をて我身を酷く蹴
仆て物餘波る奪畧る大漢に肖れば訝りるを左さま右さまを又よく見れば
吭にありける便毒の迹までも実に其奴るりけるを什麽とだろに足れて口を鉗て
居り十六郎も亦眼敏く小雪大を瞻仰て古を肚を浸して思をを。
迭に問ふに時宜るれば黄蘗を呪りー唖子の如く或い棲遑の遊戯に似て一句
も出ず默然り有右へと知るるもるに範的い悠然と十六郎に向て座れ
盜見羅れ若が積悪の最多るる律に於て免さと宥えを上れば大
事の所要あり若の義をとく做ー果さば彼罪を免さのるるも賞禄をそに依

（元）勉て其義とくまるやと問れて十六郎笑ひ何ぞ秘知らぬ人ども命を助けぬるならば縱火を踏て水に没とも做ーなぎ巳ん仰付さるぬるか。と応と表ば範的に然もこそあらめと領て我秘事い別義ふあらぬとのたまて四下と見るそ聲と低めて又ふ我ふ一箇の怨敵ありそる這御ふ名も知るに韓錦樅二郎是ぬ。他奴と陷まて怨と復さまく思ふ久ー故ふ若ふ課るに若這短刀とを箇様ー〳〵ふ揃りあば彼奴い必弥ふ入るべー既ふ来て樅二郎い搦捕れふと雪ふとも若い猶市ふ在りて便と求め夜い紛れて韓錦ぞ一家皆の奴們と一箇も漏さび刺殺ーねそぞ中ふ拔ると咽ふ做と。二八可の美女あらば其奴とのこと殺さびて搔攫てかり来るるるべ持了十二分とのたまべ。然ると若做ーかーとそ身と脱ーと辛ふ来て風と飡ふそ逐電せび樹を伐り草と茅と盡ーても索出ーて八劍ふせん心と定めて応とせよと呵々説示せば。十六郎い含笑ふ頭と拍て答るぞ。御諾兼りぬ。と皆巳ぶよくまる所御心安く思召れよ。次覚ふ信義あり。倘偽りて逃隠るぬ。強盗真利ふ畫ぬ。今宵先片端より埒と開いて吉左右と俟のみ。かーと。ふふ範的歟ひて。然らば索と饒ぬて。健宗鮮れとのそぞせいふ雪太い阿と応て庭下駄穿ゝ下立て十六郎ぞ絆索と立地ふ鮮捨れば十六郎い腕と捺りて跪居て旨と伺ふゆぬ範的い短刀と十六郎ふ遞與ーく。ふぞ。這短刀い樅二郎と謀るぬ一種ぬ遮莫事と紛ふふ其牢獄衣ぞい不便ふこそあらんさらば因て這麻衣と腰刀と取まるるるの及とのそ彼奴們を漏さ隈るく結果げよとそ。ふふと錢ぞふ。市中の徘徊不自由るえそ麻衣の袂ふ鼻紙ふ包こなる。圓金一枚容てあ。ふるる歟と脱落ぬ指揮ふ十六郎笑片向て件の一種と両ふ受て打戴ゝゝ謝恩百拜媚るふ浪ふ推禁ぞ既ふ目い暮るふ符契ぞふ後門とも歩入軌かるべ。ふふ。ふふと十六郎い毫も擬議せぎ含笑て石壁と毀ち塀と踰るい巳ぶ年来ぬるる所猫児とも

欺くを段あり出入符契と何ぶせ。只おの儘ふ五六日身の暇をゆるゝ。と應て惣て庭門より歩くも出て見ふけり。秘策既ふ果しかば軽的い是ぞ好よと。奴々ふ告て教えと。躰て後堂退りかゝ小雪大い客房ふ退て單熟々思ふ。那盗覚十六郎ハ我身の寃家であるけふ。知らぬふとらひるゞら愁ふ郡司殿ふ彼謀と薦めより。彼奴い罪と饒されて反く一脚屬られい盗ふ糧と賄し雙ふ又と貸よりも猶思ふ事る所為ゆゑ悔ゆゑと。臍を噬めどもその甲斐なけれ更ふ又思ふ。離合ハ前より料がゝる。彼美濃路と撞見しなる剪徑ふまら今茲と不測ふ再會ぬる上い伍號と又茲と撞見ふ折もあり狡甚頭の障りゆゑ間ふ早く他郷へ走るふ為りと尋思と考く次の日より大刀自ふ壁訴訟する毎ふ武者修行ふ假托て盤纏一百金を乞しかど大刀自いそか許ぬ。価い知恵あり才覚あり。幾までも茲ふ居て我児の補助ふ為ねかり。分る時い軽的も必反くハ酬ふ。武者修行する

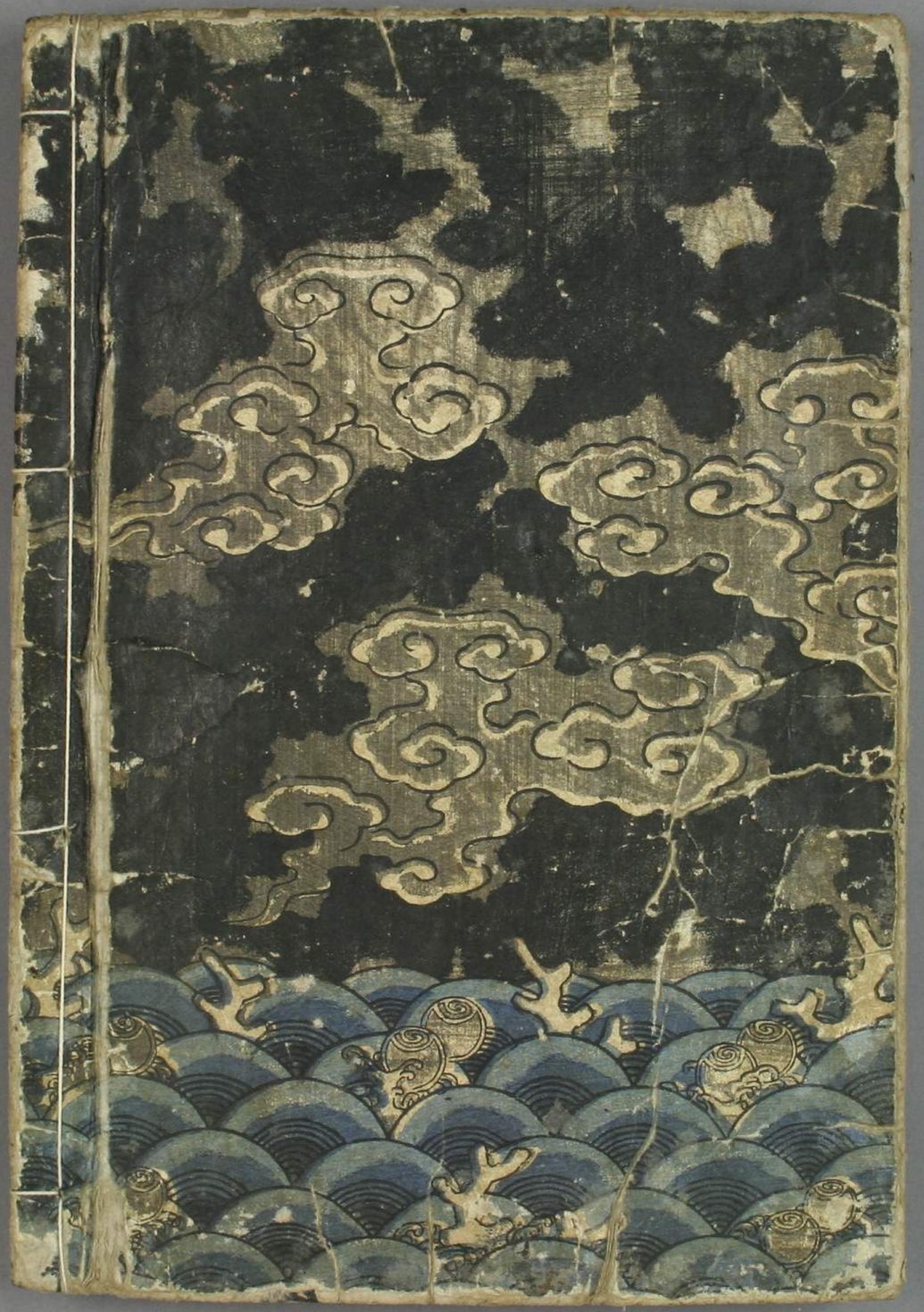
とかゝと禁めて聴べくもあらざれば小雪大い困て果て悄地ふ胸と苦しめる不題韓錦樅二郎いぬる日防守父女と大江主僕を出遣て。詞敵あらぐ為りより心左右ふ樂しからねば武藝の指南も懈り克ゆゑ侯ハ又生憎ふハ重作もまぎ妙義よりかゝる来ぬ四月ハ果て暑弥増五月五日ふ為りふけり。あの日ハ見越松時八の家子の初幟の壽祝ふ置酒御食饌の儲ありと。師の韓錦と請待せ。樅二郎ハ已と為ぬ。未下刻よりて。他ぐ宿所へ赴き押繪ハ單留守ゆゑ在り。既ふ日暮て初更ハ過やらと思ふ時候外面ふ咳ゆゑ苛めげる大漢拝ゆゑ押た找ゝ入て。大哥ハ宿所ふ在る欤と問ふと押繪ハ見かゝて不ら家兄ハ他へ出ぬ。の程ハ料りがゝる用事あらば明日ハ来ぬ。とのゝとば聞て大漢ハ訛る聲と為り立て然らば是と届けまゐらを御向ふ大哥ふ逢し時ゆゑ大切る物る乞れば和郎我宿所へ出て我女弟ふ佶と遞與ゆゑと頼れ乞れば。て来ふけり。とのハ座と投出ゆゑ短刀

ゆと二郎
ゆと二郎

鬼薊荷之
途ゆ樅二郎
と捕んとせ
たのはのお文吹のぞきうる
五十五回のたゞめは出さり
たゞゆね

おもてあらむぎらん錦の嚢ゑ入れうえ押絵ハ見んく訝りてそそ然るともあるべれど家
兄の留守ゑいらゑ奴家ゑ受さるべくもあらじ明日出更しそのく来ぬとりぐ
あるぐらも身と閃めつて出くもくと押絵ハ透さぎ追推りて屋よや侯ねと呼留
まとも折ろう皐間ゑれハ那地ゑれけん影ゑ見えぎ竟ゑいかひあるとろけれ
絵ハ単咲ん門の戸鎖て兄の女さと今狭々々と侯程ゑ夜ハ稍深て子二時侯縦
二郎ハ装れる酒の酔ゑまゑ醒ねハ跟蹌くかの来ゑけると押絵ハ躭て扶入れて却大
漢のゆ云云と告て短刀を見せまくもるゑ縦二郎ハくも見ぎそと今急ゑ見まる
ゆゆハ我ハ水を飲まく欲を汲ゑて来よとハそぎハ押絵ハ只得指燭して庵温
へとそ立程ゑ縦二郎ハ侯間もるく肱と枕ゑ醉臥て鼾の聲のを高るける是より
後ハ亦下回ゑ解ん看官先右の綉像を閲せら其大槩を知らんかし。

新局玉石童子訓巻之二十四終

村田

清香
奇薬
梅の雫
色七十二孔
めまひ
はき
はく
化粧水
花橘
同の補ハ
六十四銅
古今無類の化粧水
美容にわかく
今の妙薬
責弘所
浅草傳馬町
二丁目中程
丁子屋平兵衛